

第2回滑川市まちづくり共創会議開催結果

開催日時 令和4年11月7日（月） 17:00～19:00
会場 滑川市役所3階大会議室
出席者 委員15名、藤野英人特別アドバイザー、
市長、副市長、教育長、総務部長、産業民生部長、教育委員会事務局長、
市民健康センター職員、事務局（企画政策課）

	委員	備考
1	星名 照彦	座長
2	廣瀬 淳	副座長
3	福井 信英	
4	清水 義彦	
5	土肥 薫	
6	石田 拓人	
7	深井 あゆみ	
8	樋口 幸男	オンライン
9	桶川 高明	
10	砂子 典章	
11	金川 奈那美	
12	浦田 結那	
13	長瀬 めぐみ	
14	由井 千尋	オンライン
15	山内 大河	

議 事 ①地域資源の活用と地域のブランディングについて
②子育て支援と教育・人材育成について

ポイントごとに自由に意見を交わしていただいた。内容については別紙のとおり。

【議 事】①地域資源の活用と地域のブランディングについて

座長

本日のテーマに入る前に、前回、時間が足りずご意見が聞けなかった「地域資源の活用と地域資源のブランディング」について、旧宿場町の古い町並みなどについて、皆さまからご意見を伺っていきたい。

委員

瀬羽町でのアプローチの仕方だが、「このポイントをどんどんPRしていきましょう」というように、行政や団体が入ってしまうと、カオスであるが故に魅力的な部分が秩序立って、魅力が失われてしまうのではないかと。現状カオスと言うか、誰も仕切っていない感じで、皆がのびのびと自由にしているところを大切にしたいと思う。ただ、実際問題として駐車場が無いなどの問題はあるので、こちらが主体的に「これをやっていきましょう」というよりは、「何かあれば手伝う」というスタンスで意見を聞いていく形が良いと思う。また、瀬羽町の対岸である常盤町周辺でも、ボードゲームカフェや新しいカフェなどができているので、ほたるいミュージアムとその周辺、瀬羽町というところを繋いでいくと、回遊できるような流れになって良いと思う。

委員

ベトナムランタンまつりがあるので、外国籍の労働者が日本語を学びながら、日本人たちとの交流を深めていく中で、瀬羽町の賑わいの一翼を担ってくれるのではないかと期待している。

また、瀬羽町には駐車場の問題がどうしても大きく横たわっている。店も客も増えているのはいいが、駐車場の問題が解決しないと近隣の人たちとの軋轢を生む可能性もあるので、そこはもう少しちゃんとする必要がある。

座長

確かに人を集める場合には駐車場が必要になってくると思う。

その他、イベントについてのご意見やアイデアの他、滑川の旧市街とかがこうあれば良いという思いを聞かせていただきたい。

委員

瀬羽町は自分もあの雰囲気がとても魅力的だと感じている。お洒落な店がどんどん建ってきていて、カオスな感じと言うか、少し古びた感じの街並みの中に、どんどん新しいものができて、よく言えばイノベーティブな感じ。でも、別の見方をすると当時良かった景観がなくなってきたというような印象も受けている。

例えば金沢や他の宿場町のように、何かルールを作り、「こういう感じのまちづくりをエリアとしては目指している」というものを在りたい姿として決めて、それに沿った形で、それぞれが自由につくっていくというような感じが良いのではないかと。今の時点でもルールが全くないという訳ではないと思うが、町並み全体として「こういう姿で在りたい」というものがあつた方が、例えば行きたい店があるから来る人だけではなく、その町並み全体で偶々その店があつて来るような人も集客できると思う。

座長

確かに、一つだけのものがぽつんぽつんとあるよりは、点を線にする方が良いと思う。そういう観点でご意見やご提案、アイディアはあるか？

委員

僕は瀬羽町も含めて、ほたるいかにミュージアムでも店でも何でも、滑川に来る理由が1個でも増えるのは良いことだと思う。目的や順番はどちらでも良い。店に来た人がただ買い物をして帰っていくのは勿体ない。折角滑川まで来てもらったのであれば、他にもお金が落ちる流れをつくるのができたら良いと思う。

後、市内の各場所と中滑川とか滑川駅は地味に遠い。歩いても行けるが、東京や京都ならばLUUP（ループ）という電動スクーターで、簡単に移動できる仕組みが少しずつできてきている。電動自転車やレンタサイクルではなく、今の時代に合ったもう少し先進的な移動方法を導入すると、それを面白いと感じた人が滑川に来るきっかけになるのではないかと思う。

藤野特別アドバイザー

最後の意見はすごく面白い。どういう移動手段を使っているかによって面白さや個性が出てくるところがある。例えば、先程あったLUUPの話であったり、電気自動車であったり、回遊バスであったり、もしくはセグウェイであったり。多少遠くに駐車場があっても、LUUPとかセグウェイで回ることができるということであれば面白さが出てくる。回遊手段をどうするのかということは結構重要だと思う。

その時に、完全にギチギチにするとカオス感がなくなって、面白くなくなるというところがある。何かまち全体の中で「こういう概念を大切にしている」というようなものがあると良いと思う。

それが建築的なところで「何cm」とか色とかを決め過ぎてしまうと面白味がなくなる。法律や条例で縛るという形ではなく、むしろコンセプトとして、「こういう風にしたい」というところが、精神的に共有される状態が良いと思いながら話を聞いていた。

何にせよ、僕自身は今後の瀬羽町の発展については、「夢しかない」と思っている。ここにいるメンバーがワクワクしていることが大事なのだと思う。

委員

飛驒には、里山サイクリングというものがある。先程、移動手段について「レンタサイクルではなく」という意見もあったが、サイクリングではなくても、地元の人との触れ合いというところもセットで里山を回るのが楽しかった。

私は今年の3月くらいにホタルイカの工場見学を偶々させていただいたが、それも人脈があって初めて門を叩いたことである。人との繋がりがなかったらなかなか言い出せず、魅力も分からず、その土地で物を買って終わりになってしまうと思っている。でも、そこを繋ぐ、ハブになっていただけの人が居ることで、一步踏み込むことができる。

キーマンが居て、キーマンに申し込めばディープなところを案内してもらえるみたいな状態ができると良いと思う。滑川は本当に自分で門を叩かないと分からないことがとても多いが、その分かりにくい部分に魅力があると思っている。

委員

新しいイベントも良いが、保存会やぼんぼこさ、ベトナムランタン祭りなど、今頑張っ

いる団体を応援するのが良いと思う。そこから派生して次のイベントが生まれると思う。

委員

移動手段の話が出ていたので、移動手段に絞って話をさせていただきたい。

5年前から大学生が常盤町のコワーキングスペースで働かせてもらって、そこからまた大学まで戻るということをやっているが、大学生は滑川駅からコワーキングスペースまで歩くことを嫌がる。ほたるいかミュージアムも同じくらいの距離にあるが、それも歩くことを嫌がった。レンタサイクルを探したが、恒常的にはない。

また、滑川駅前で東京からの観光客に遇った時に、折り畳み自転車を持って降りられた。どうしたのか訊いたら、「ここには移動手段が何もなくて前回懲りたから、今回は自分で持って来た」と言う。先程、セグウェイなどの話も出ていたが、15年くらい前にはほたるいかミュージアムに無料バスが回っていた。ここで生活する人も観光で来た人も、自由に乗車できた。そういう手段で、ほたるいかミュージアム・道の駅、常盤町から旧街道を通過して瀬羽町、そして滑川駅に戻るといふ、車のない東京から来る観光客への移動手段として提供できないかと思う。

先週の金曜日（11月4日）には、県立大で自動運転のレベル4の実証実験が行われた。まだ実験段階であり難しいのかもしれないが、話題性もあり、凄く良いアピールになるので、自動運転実装の場に滑川を提供するという形も考えられないか。

委員

先週の金曜日の富山県立大学の自動運転のレベル4の実証実験について補足する。富山県立大学のDXセンター、射水市と企業が連携して、射水市の小杉駅から県立大学まで自動運転できないかというプロジェクトがある。大学に行くにも交通手段が無いというところがあった。自動運転までいくと、「目新しさの一番上」みたいなところまでいくと思うので、話題性は十分にある。SNS等で発信することで、色々な人に知ってもらい、人を集めるというところも重要だと思っている。

座長

滑川市はどうしても交通手段がネックになるのかなと思う。

他にご意見がなければ、本日のテーマに移りたい。

【議 事】②子育て支援と教育・人材育成について

座長

事前に資料を配布しているので、事務局からの説明は割愛させていただき、まず1番目の子育て支援について話をしていきたい。資料にもあるとおり、滑川市は妊娠期から就業前まで、子育てに関しては手厚い支援がされているが、その他にも何かあれば発言いただきたい。

委員

核家族化で家族や地域の繋がりが薄くなってきた。更にコロナ禍でコミュニケーションを取る機会も少なくなり、ワンオペ（一人で子育てをする）というお母さんたちが増えてきている。密室育児をする方が増えていく中で、子育てへの不安感や負担が凄く増えているということを私も聞いている。繋がりを持つことができる場をつくっていくことが大事だと思う。

また、私も子どもがいるが、妊娠期から子育て期間において、普段は母子手帳を見ない。予防接種などは忙しいとついつい見逃しがちになり、接種期間がギリギリになったりもする。母子手帳アプリのように、携帯やスマホに通知が来るとい仕組みがあると、お母さんたちや家族が助かるのではないかと思う。

委員

東京都世田谷区も紙媒体の母子手帳である。予防接種の案内など、オフィシャルのものは全て紙であり、なかなか情報が入ってこなくて困っている。

子どもを生んでから滑川市には2～3回帰省したが、友達などに話を聞くと、滑川市は児童館も新しいし、保育所もほぼほぼ入れる。子育てする場所はいっぱいあり、手厚いというのは事実だと思う。不妊治療の助成なども、今後はどんどん必要になってくると思うので素晴らしいと感じている。

私が里帰り出産しなかった理由を率直に話すと、富山県内全体で無痛分娩できる場所があまりない。東京も充実していると言われると微妙なところではあるが、無痛分娩を希望する女性は本当に多い。自然分娩からプラス10～15万円が相場だが、それでも希望をする人は増えている。私も無痛分娩を希望したが、帰省直前に「特別な事情がある人しか無痛分娩はできない」と聞き、結局、東京都内で自然分娩で子どもを産んだ。もし富山で無痛分娩できる態勢であれば、二つ返事で帰ったと思う。

また、里帰りする人にとっては実家の親との遣り取りが必須だが、実家を離れて長いとなかなか親との遣り取りが進まなかった。主人が滑川市内でテレワークできる環境も充実しておらず、富山に来て仕事ができなさそうという理由もあった。

滑川に帰って子育てをすとなると、子育ての情報はゼロベースで、友だちに情報を聞くしかないという状況。実家で子どもを生んで1～3か月里帰りをして、あまり情報も入らないので帰ることに不安を覚えてしまった。

私から滑川の産後のサービスがこうあってほしいというものがあるとしたら、若い人が「滑川に帰りたい」と思う一つのタイミングが産後の帰省だと思うので、「子育てするとか、子どもを産むなら絶対に滑川が良い」というような何かがあれば良いと思う。

例えば、今、産後ケアだと、令和2年に母子健康法の改正法が施行され、令和6年までに産後ケア施設の充実を目指すという内容になっているらしく、東京では、民間の1泊8万

円程度の非常に高い産後ケア施設が今年に入って3つか4つできており、その金額でも予約がいっぱいという状態である。滑川にもそういう施設があれば、使ってみたいと思う。滑川なので、海が絶景な場所や、滑川市が見渡せる場所などで産後ケアを使えたら最高だと思った。

委員

滑川市は早くから子育てに関する施策に着手している。以前にシングルマザーについて市職員と話をした。滑川には会社もたくさんあり、フレックスやパートで働けるような場所もある。市営住宅や、幸いかどうかは分からないが空き家もある。

市外・県外から子どもを連れて移住した人に、働きながら育ててもらおうということ、確か鳥取県が積極的にやっていたと思う。外部から来た場合でも子どもは大きくなっていくので、悪いことではないと思う。そういう意味では就業や住まいの斡旋を子育て支援に加えてやっていると、広がりが出ると思う。鳥取県がどのくらい効果を上げているかについては確認していないが、滑川市が現状で人口がそれほど減っていないということは、それだけの要素は備えていると思うので、旧市街地の活性化や新たな情報がまた入ってくるという状況になれば良いと思った。

委員

子育てについては当事者でないと喋りにくいところもあると思うので、是非、日中にお母さんたちの意見を聞いていただきたい。

夏休みや冬休みになると、会社のパートの女性たちなどが凄く忙しそうにしている。同居家族や祖父母が何km以内に居る人は学童保育が使えないというルールがあると聞いて驚いた。昔であれば祖父母と同居が普通だったので、子どもを自分たちの親に預けるということができたのかもしれないが、そのような昔の習慣や風習がそのまま残っているが故に、今の働き方や価値観とギャップが出てきている部分があると感じた。

座長

働く人にとっては学童が必要だが、一方で学童関係者の人員不足などの問題もあるのではないかと感じた。

委員

会議出席に際し周囲に聞いたところ、学童に対する一番大きい不満は、宿題をさせてくれないということだった。「学童は保育であって、宿題をする場ではない」ということで、宿題をする時間を作ってくれないという不満が多かったので、この場で共有する。

ただ、資料にも「多くの児童を受入れ、安心・安全に運営するためには地域の方々の人的協力が必要だが、その確保は難しい」と書かれており、ここに尽きると思う。いつも思うのだが、福祉の事業を行政がやってしまうと、どうしても善意に頼ってしまうという現状があると思う。善意に頼りつつも、ある程度仕事としても成り立つような状況をつくっていく必要があるのではないか。

また、PTA役員についても、参加してくれる人の善意に頼って運営していくとなると、どうしても皆、余裕がなくなってくる。共働き世帯はどんどん増えており、PTA役員をやる余裕がないという人も増えている。そういったところで、やれるようなインセンティブを、どういった形になるのかは分からないが考えていく。少なくとも善意に頼りただけの形でやっていかない仕組みをつくることにチャレンジしていく必要があると思う。

座長

今までの話の中で、何か気づいた点などがあったら、藤野特別アドバイザーからアドバイスをいただきたい。

藤野特別アドバイザー

違う観点で少し話をしたい。意外と盲点だが、男女ともに「産まない決断をしている人」もしくは「産めない人」がかなり多く居る。

富山県成長戦略会議でも、女性が県外へ流出してしまうという問題の中で、「産むことを奨励する文化」という論点があった。色々な人が居て、色々な事情で「産まない決断をする人」や「産めない人」が居る。「産みたいと思っているが産めない人」に対して、不妊治療の道があるのは滑川市のとても良いところだが、多様な人が楽しく暮らせるということが大事。地域の中に居場所があって、気楽に住むことができ、県外に逃げずに済むというようなことがあるのではないか。

「産む人を助ける」というところに視点がいきがちだが、「産めない人」や「産まない決断をした人」も居辛い社会をつくるという観点が必要である。「産む」という能動的なアクションではなく、「産まない」という非能動的なアクションに対して行動を起こすことはなかなか難しいが、「産まない人」や「産めない人」に対する目線もあれば良いと思った。個々の人が様々な自由な選択をすることができて、女性が必ずしも「産むことを強制されない」ということが、逆説的に産みやすい環境をつくることになるのではないか。滑川市も色々な人の選択肢を大切にするという目線があると良いのではないかと、皆さんの話を聞いて思った。

委員

僕は滑川市が切れ目のない支援をしているとか、長い間子育て支援に力を入れているということすら知らなかった。子どもが産まれるような段階になると自然に情報が入ってくるのかもしれないし、本気でキャッチしに行かないと情報が得られないのかも分からないが、知識がない人がいるのも事実である。

その中で僕が今、滑川市に居るのは、ただ自分の地元だから戻ってきて、偶々、子どもをもつことを考える時期に差し掛かっているだけで、子育て支援が充実しているからではない。子育て時期前に滑川市の子育て支援が充実しているということを知る機会があれば良いと思う。

ただ、僕は広報も読まないし、テレビも観ないし、新聞も読まないし、ラジオも聞かないので、どこで情報を得たら良いのかが分からない。例えば、Instagram や YouTube の広告などで僕たちや僕たちより若い子育て世代の人たちをターゲットにした、滑川市の子育て支援についての情報が流れてきたら、「滑川市を候補に入れてみよう」ということになるのではないかと思った。

座長

滑川市の子育て支援は手厚く、例えば高校生まで医療費を無料にしたのも県内でトップクラスのスピードだったが、PR不足というご指摘だった。こちらに関して、何かご意見はあるか？

委員

子育て支援については明石市が有名である。市の予算の大半を子育て予算として注ぎ込めば、人口も増え、経済も活性化し、良いことばかりであるということが、実証的に証明されつつある。

そういう意味では滑川市は前市長の市政で、子育てに集中投下したというのは、非常に分かりやすく良いやり方をしていたと思う。そういう意味では、「知らなかった」という意見が出たことに驚いた。

僕はどちらかと言うと、子育て支援についてはもう十分やっているのではないかと感じており、ここで更に子育て支援をどうするというよりは、その次の放課後児童クラブや小中学校などをセットで考えないと、良い議論ができないのではないかと思う。滑川市で産んだは良いが、すぐに市外に出ていくとか、産む時だけ帰ってくるとかではなく、育ていく過程で滑川市の良さを知ってもらい、子どもの感覚を伸ばすことができれば良いと思う。先程の議論の中で思っていたことを言うと、既にあるものをもっと利用しないといけないと思う。例えば、市バス（コミュニティバス）は結構ガラガラだと思う。それならば、子どもたちに使ってもらえば良いのではないか。

例えば、寺家小学校から児童館へ授業が終わるくらいの時間にシャトルバスを出すとか、小学校間をバスで巡るとか。そのバスもただ走らせるのではなく、英語のBBCのニュースを流すとか、もっと子ども向けの英語やゲームの画面だけ流すとか、子どもたちが「何だろう？」と興味を持つようなものをずっと流す。児童館や博物館、ほたるいミュージアムなどの降ろすスポットもあるが、バスの中にずっと居ても面白いというような仕掛けをする。今は使われていないバスを隅々まで走らせていて、相当無駄だと思う。それならば「放課後児童クラブが使えないのであれば、とりあえずバスに乗って児童館に行きなさい」という案内ができる方が、保護者にとっても良いのではないか。

新しいものをつくってもいずれ使われなくなるし、僕たちも飽きてしまう。それよりも、既にある資産を有効活用し、降ろしたいスポットで人々を降ろしつつ、かつ移動中も楽しく、学びの場にする。

今更子育てに集中投下しても明石市の二番煎じになるので、それよりも天然のコンパクトシティだからこそできる施策を考えていけば良いと思う。

座長

他にご提言がなければ、2番目の小中学校の教育についてに議題を移す。小・中・高の教育についてと、高校を付け加えた形でのご意見でも構わない。

まず、①のICT教育の現状などを教えていただきたい。

委員

タブレットはあるが、高校の普通の授業では使わない。オンライン授業の時に使った程度で、自宅には重くて持ち帰らない。

商業科では表を作る時にExcelを偶に使うくらいで、ほとんど使っていない。正直、何のためにあるのか分からない。

委員

高1と高3の子どもがおり、学校からタブレットを偶に家に持って帰ってくるが、やはり扱いきれっていない。主に古文など国語のレポートを打ち、紙に印刷して出すところまでしないといけないのだが、全然追いついていない。小中学校では全然、そういうことをやっ

てきていないので、タイピングスキルを身に付けたりとか、もっと早い段階から対応できるようにすれば良いと思う。

私もサポートしきれていないところがある。親も慣れるために、小中学校くらいからICT教育をしていただけたら良いと思う。

委員

今までの皆さんの話は学校に行く前提の話だったが、学校に行かない子や学校に行けない子もいる。そういう時こそロイロノートが役に立つと思うのだが、ほとんど連絡用としてしか使われていない。

今回の会議に際し色々な人に話を聞いて出てきた意見であるが、学校に行けない子が行く場所に「あゆみ教室」がある。正確には分からないが、例えば各学年に1人か2人の学校に行けない子がいるとすると、各小学校で10人程度。中学校まで合わせると、場合によっては100名程度の学校に行けない子どもが居てもおかしくない。だが、この状況の中で「あゆみ教室」に来ている子はほんの数名である。ということは、「あゆみ教室」にすら行けない子が実際には滑川市に溢れているという現状がある筈である。

それならば、ロイロノートをもっと活用できるのではないか。オンライン授業とまではいなくても、授業の振り返り、例えば授業を撮影したものを振り返りとして活用できれば、普通に学校に通っている子にとっても復習になるし、学校に行けない子のフォローもできる。YouTubeでも何でも良いと思うが、今はコロナの問題があり、少しでも何かあると数日間学校に行けなくなる。その間に授業に遅れていくという子どもたちが出ている中で、その辺のフォローもできるのではないか。学校に行ける子にとっても、行けない子にとっても、プラスになると思う。

委員

先程、タブレットを持っているのに使っていないという話を聞いて驚いた。

小学校の先生などを対象としたプログラミング教室で、「教える側を教える」というようなことに参加したことがある。少し言い方が悪いが、小学生の理解度と先生の理解度は大きく変わらない。

ICT教育をしていく上で一番大事なことは周りの知識である。保護者世代にはお金がかかることを気にしている人が居るが、今はタブレットも結構安く買えるし、タブレット側で制限をかけることもできる。もっと気軽に小さい時からタブレットなどを与えて、自分で何が良いか何が悪いかを考えさせるような経験がないと続かない。

今年から高校でも情報の授業が必修化されたと思うが、その時に大事なものは、小学校や中学校で情報やプログラミングを嫌いにならないことだと思う。別に好きになる必要まではないが、パソコンを使うのが嫌いだと、情報化社会と言われる中でついていけなくなると思う。だから、保護者などの周りの人が自分も知識をつけていき、子どもが自分でどんどん調べていくような機会をつくるのが、今後のICT教育として大事だと思う。

委員

うちの小学5年生の子どもは、重いタブレットを毎日持ち帰ってきて、毎日10時くらいまでやっていて、毎日怒られている。小学2年生の下の子もそれを見て、横に並んで重いタブレットを開きゲームをしている。本来の使い方ではない使い方をしていたりもするが、使っている人は使っており、しかも数年前とは違うタブレットの使い方になってきているのではないかと。

小中学校におけるICT教育については、先の委員のご指摘に同感で、使う側のリテラシーが低いから成長を阻害していると思った。

僕は夏休みの自由研究をプログラミングなどにすれば良いと思う。30年くらい前と夏休みの自由研究は何も変わっていない。ある程度、強制力をもって子どもにタブレットを使わせるような環境を用意した方が良い。

先生に「しっかり教えてほしい」と言っても厳しいと思う。先生は色々な事を教えないといけないし、学ばないといけないので、何でもかんでも押し付けるとするのは厳しい。でも、課題を変えるとか、考え方を変えるとかであれば一斉にできると思う。

他にもそういうポイントはいくつかあると思う。外側から変えていく、仕組みで変えていくということができれば、ICT教育は進むのではないか。

委員

今までの皆さんの話は保護者としてとか、生徒の立場でという話がメインだったと思う。先生を擁護するつもりではないが、知っていただきたいこともある。

資料2の15頁にICT推進協議会の資料についてだが、この表の中の「令和4年の実際」というところの一番上に利用率がある。利用率は「小学校で1日1回以上は39.3%、中学校では14.3%」。これは先生がなまくらをしているから低い訳ではなく、「ただでさえ忙しいのに、これ以上何をしろと言うんだ？」という先生の叫びだと僕は思っている。1つ求めるのであれば、1つやることを減らしてあげないといけない。

つい最近も2020年に英語が必修化した。それに四苦八苦して、今は専科教員が英語の授業をやっている。それと一緒に、今度はICTをやれと言われているが、元々先生はデジタルネイティブではない。「変えろ」と言われても変えられない。やらないといけないはずと例年どおりに求められていて、更にプラスアルファを上積みさせられている状況である。

富山県内の教員採用試験はいよいよ全国最低倍率になった。競争率は2倍、小学校に限って言えば1.6倍と、ほぼ全入に近い状態である。これは若者たちに、先生という職業が選ばれていないという証拠である。これ以上、先生を叩いても駄目だと思う。

だから先生の仕事を減らすことを考えないといけないし、減らせないのであれば行政としてもサポートしなければいけない。

今はデジタル教科書が配布されているが、その状況でも利用率が39.3%や14.3%ということは、今までどおりの授業をまだやっても大丈夫な状況があるということである。コンピュータを使わなくても今までどおりの授業ができ、これが自分の最高の授業だと信じている先生もいる。その中で、上手くやっていくためには「もう少し時間をください」という数字だと思っている。先生も頑張っているが、明日すぐに上手くなるわけではない。

皆さんの言葉も分かるし、僕も言いたいことはたくさんあるが、敢えて逆の立場から喋らせていただいた。

座長

このICT教育は、コンピュータなどを使って、そもそも先生方の負担を少なくするための施策だったのではないかとも思うのだが、藤野特別アドバイザーのご意見をお聞かせいただきたい。

藤野特別アドバイザー

僕が応援している会社に、福岡県に本社がある株式会社しくみデザインという会社がある。

今は九州全域で使われているプログラミング教育のためのアプリケーションを作っている会社であり、そのプログラミング教育の最大のメリットはプログラミング言語を使わないことである。プログラミング言語を使わずに、プログラムの考え方を身に着けるといふので、それが学校の先生の負担が非常に少なく、また絵を描くような感覚でプログラムを動かすことができるので、子どもが非常に面白がってやるということで、全国に普及しようとしている。プログラム思考が身に付けば、後はそれをプログラミング言語に置き換えていだけなので、非常に有用な教育だと言われている。

先生がプログラミング言語を全部覚えて、子どもたちに学校で綺麗に教えるようになるというのは、極めて過酷な話である。それを先進的なアプリケーションやハードなどで支え、先生の負担を減らしてあげるように考えることが大事だと思う。

委員

大人が夢を諦めていたら、子どもたちも夢を描けない。大人が挑戦できないまちは子どもたちも挑戦し難いまちだと思う。子育て支援と同じように、頑張りたい大人を支援できる制度があったら嬉しい。

後、リベラルアーツ的なものも含めて、まちの文化を広げる、市民の視野を広げる文化も活発になってほしい。

委員

市内のコワーキングスペースで、プログラミング教室 Coder Dojo というのをボランティアの方がやっているのだから、その取り組みを紹介させていただきたい。「先生にはもう余裕がないので、そこに ICT 教育やプログラミング教育って言っても厳しいだろう」というのが教室運営をしている専門家の目線だった。それならば、地域の人々協力が必要になってくると思う。市役所と地域の方々が、市内でもノマドワークされている方やプログラミングをされている方が居るので、そういった方々を繋いでいく。そういうことを我々民間も協力しながら、一緒にやっていく必要があるのではないかなと思う。

いきなり居ない人材に「やれ」と言うのは過酷なので、まずは居ない人材を見つけていくということも併せてやっていければ良いと思う。

委員

行政も頑張っているということを一言伝えたいと思う。

つい去年、一昨年までは、教室全員でタブレットを使うと固まってしまうくらい、凄く回線が細かった。これが学務課を中心に予算をとって回線を4倍に広げたおかげで、今は快適に使うことができる。市内の小中学校全部で負荷をかける実験をしても固まらなかったというデータも出てきているようで、やっと先生も使える状況になった。

先生も子どもたちも使う人はどんどん使っている。二極化しているという言い方はしたくないが、今は過渡期にあるのではないかなという気がしている。

委員

小中学校で回線が良くなったという話をされたが、高校は凄く固まる。タブレットを使わない原因はそれも一つあると思う。全員でタブレットを開いたら固まって、授業が進まない。

座長

実際、教育の在り方は変わってきているようである。

それでは、②ふるさと教育の推進についてに移りたい。恐らく滑川市を愛するような教育をした方が良いかということなのだと思うが、何かご意見やご提言があればお聞かせいただきたい。

委員

「ホタルイカのまち滑川」として、子どもたちにはホタルイカの良さを知ってから全国に出ていってもらいたい。その中で、私は昔から小学生の子どもたちをほたるいか海上観光の船に乗せたいと以前から言っている。一番良いものを子どもたちに見せるべきだと思うからである。ほたるいかミュージアムの発光とは全く別物なので、子どもたちに漁師が獲っているホタルイカを見せたい。一番良いものを見せることが、子どもたちにとって、ふるさと教育にとって、一番良いのではないかと考えている。

具体的に言うと、GW明けが一番学校に行きたくなくなる時期でもあるので、そのGW明けのほたるいか海上観光が終わった時期に、小学3年生、4年生、5年生などの、どこかのタイミングで子どもたちをほたるいか海上観光の船に乗せたい。朝が早いから大変であるし、海が荒れて出航できないとか、ホタルイカが全然いなかったとか、それも含めて経験ではないかと思う。運が良ければ凄く良いものを見ることができるといふ、それを経験してもらえると良い。

私が昔何かで見たのは滋賀県の子どもたちは皆、琵琶湖の船に乗って、琵琶湖の良さを知ってから全国に出ていく。それを見た時に、滑川だとこれしかないと思った。

委員

毎年、近くの小学校の2・3年生がりんご園に見学に来た時に、少しだけ収穫してもらったりしている。他の小学校でもりんごに限らず、他の農家などを回るのも良いと思っている。

意外と滑川でりんごが作られているということを知らない子が多いので、それ以外の作物を作っている農家なども知ってもらえたら嬉しい。

委員

僕自身滑川は好きだが、一回海外・県外に出て色々な場所を見た結果、地元って最高だと思っただけである。先程の話を否定する訳ではないが、ホタルイカとか他のそういう観光資源があつて、それが好きで滑川に帰って来た訳ではない。滑川の程よく生活するに困らず、程よく何も無い。特別何も無いという感じと言うか、この田舎な感じが良かったので、「ふるさと教育」とか「滑川を愛する子どもを育てるために」というこの議題の趣旨とは外れてしまうかもしれないが、滑川市以外に触れる機会を増やすことで、自然と滑川の良さに気づいてくれる人は必ず居ると、自分の体験を通じて感じた。

勿論、東京や国外に触れることで、そちらの方が良いと言って出て行ってしまふ人は一定数居ると思うが、逆に外に触れることで元々居た場所の素敵さに気づくこともあると思う。海外に連れて行った若い子たちが皆言うことは、「日本って良い国だな」と。海外に行つて日本の良いところも悪いところも気づくことができるということが、感想として凄く多かったので、それは日本と海外いうスケールだけではなく、滑川市というまち単位のスケールでも起こり得る感覚ではないかと思ったので、滑川市以外に触れると良いと思う。

委員

飛騨でも、何も無いということ子どもを大学から外に出すというところがあるが、多分、全国一緒なのではないかと思っている。滑川もきっと親が「滑川には何も無いから」、「富山には何も無いから」と言って子どもを外に出す。親がそう言って外に送り出せば、子どもはそう思って出て行く。

先程、子どものためにホタルイカを見せるとか、りんごを見せるとかいう話があったが、そこは親とセットで、親と一緒にどれだけ感動する時間を与えられるかということが大事だと思う。

ここに来ている人たちは大体、滑川のことを好きな人たちだと思うが、そういう人たちが「滑川は良いところだ」と発信し続けることも同時に必要だと感じた。

委員

ほたるいか海上観光の話は、自分が子どもの頃に本当にやりたかったと思った。この後のキャリア教育のところで話す予定だったが、進学や就職で県外に行くと、絶対に出身地の話になる。「何処出身?」「富山だよ」「富山の何処?」「富山市の横にある滑川」「滑川って何があるの?」「ホタルイカだけど、分かる?」という、ここまでが全部定型文。ホタルイカは食べて美味しいだけではなく光って綺麗という話もしたいが、私はほたるいか海上観光を体験したことがないので、あまり話をできない辛さがある。そういう経験があったら、もう少し地元愛があったのではないかと思う。

また、給食でホタルイカのフライが出てきた。正直に言うと、当時の私は食べられなかったのだが、今思うと、あれは今の私が食べたくてもなかなか食べられない、本当に最高級のもので、貴重で、良い思い出になるものだったと思う。

就学や就職で県外に行くと、辛い時に地元を思い出すことが必ずある。そういう時に、地元で強烈な思い出がどれだけあるかによって、地元愛が変わってくるのではないかと思う。どれだけ地元で良い思い出を残せるかということが一つのキーで、若い内にどのくらい地元のことを知り、かつ外のことを知るかということは大事なことだと思う。

委員

うちの子が行っている学校では、学童などで野菜と一緒に植えて収穫する食育体験がある。ただ、今の若い世代は食に興味が無い人が多い。学校では食育をやっているが、家では全然という方もいるので、家族で生産者のところで体験するとか、そういう機会があれば良いのではないかと思う。

藤野特別アドバイザー

殆どの地方のリーダーは自分の地方と東京しか知らない。大体の地方のリーダーは自分の地域から東京に来て、東京との比較で地方を語ることが多い。一方、地方に来る人は他の地方を転々と体験している人が多いので、サービスを受ける人の方が体験価値が高いということが良くある。

それがどういうことかと言うと、「うちの水は旨い」「うちの食べ物は旨い」「うちの米は旨い」「うちの自然は素晴らしい」とか言っているが、地方は何処も自然がいっぱいで素晴らしく、水や空気が綺麗で、食事も美味しい。そうするとその中で相対的に自分たちの強みは何かを知るには、他地域に行かないといけない。地方のリーダーが他地域に行く機会がないと、多分、地域資源を掘り起こせない。何故かと言うと、相対的に何が良いのか、悪いのかが分からないからである。

ここに居るメンバーの方たちは地域のリーダーの方が多いので、是非、東京以外の地域の場所のベストプラクティス（＝最善・最良のもの）をたくさん見ていただきたい。そうすると自ずと滑川の良いところが見えてくると思う。

僕も日本全国や海外のあらゆるところに行っている中で、滑川の凄いところは何かと言うと、やはりホタルイカ・海洋資源は圧倒的な競争力があると思う。勿論、ホタルイカは魚津とかの近辺や鳥取などでも獲れるが、それを町おこしのシンボルとして掲げられているという点で、滑川は非常に強いものを持っている。他地域では、滑川のホタルイカに当たるようなものがほぼ無い地域が多いので、そういう意味で言うと滑川が凄く強いものを持っているのは間違いないと思う。滑川にずっと居る人たちは逆にホタルイカがあるのが当たり前で価値が分からないかもしれないので、子どもの時からホタルイカの生態を知ったり、それも親と一緒に体験するという流れになると地域としても非常に強みになると思う。だから、地域資源と言うとホタルイカとホタルイカ絡みの生活体験、これを家族と共有する。それが結果的に他地域に行っても非常に心に残っていて、滑川に戻ってくるとか、もしくは外から応援するというところに繋がっていくと思う。

座長

時間も迫ってきたので、③キャリア教育の推進について、ご意見・ご提言をいただきたい。

委員

今程のふるさと教育に重なる部分もあると思うが、本物に触れるということ、本物に触れる瞬間を教室の中につくることが大事だと思う。

更に具体的に言うと、今度は企業の方や社会人の方に、学校の中にどんどん入ってきてもらうという触れ方である。両親の働き方を見に行くということも大事だが、その人たちが学校に入ってきて先生をする。そこで語っていただき、心を動かす瞬間をつくらせよう。。これは社会に開かれた教育課程ということで、今の学習指導要領の根幹になっている。学校は10年後に社会に出て行く子どもたちを育てる場なので、これからの社会をつくり出す上で、本物の人たちが語り掛けて能力を高めるところがポイントだと思っているので、どんどん学校に入ってもらえたら良いと思う。

文部科学省のホームページにも出ているが、去年、早月中学校がキャリア教育優良校に選ばれている。既に滑川市内で始まっていることではあるが、小学校・中学校、何処でも保護者がどんどん入ってきて探究活動を一緒にするという、そういう場を増やしていければ良いのではないかと思い、アイデアとしてお話をさせていただいた。

委員

今、小学校の校長先生・教頭先生と検討しているところだが、来年度にうちの小学校の6年生を対象に総合の時間を使って、起業家教育をしてもらうことを検討している。そこで何をするかと言うと、地域の公民館祭りで子どもたちに企画から集客、採算——幾らで物を売って、幾らを稼ぐか、という体験を、保護者と一緒にできないかと思い、今、検討している。

総合の時間を活用するに際し、地域の人々が学校に入ってくる時に教育というフォーマットに当て嵌めてしまうと動き辛くなってしまふところがある。地域の人たちが入ってきてやすくなるように、行政には柔軟性を持った仕組みを検討しておいていただきたい。

藤野特別アドバイザー

起業家教育のフォーマットを僕たちは持っており、全国で実施している。幾つかあるが、例えば東京証券取引所と一緒にやっているプログラムがあって、東京証券取引所の方が共催であったり、出店を開くためのチーム作りであったり、地域のコミュニケーションであったりというところのノウハウがある。もしサポートが必要であれば、東京証券取引所と繋いだり、他にもそういうことをやっている大学の先生なども居るので紹介できると思う。実は起業家体験プログラムは、僕もかなり情熱をもって各地域でやっている。これは日本にとって非常に重要だと思っているので、必要であれば協力するので相談してほしい。

委員

商業科は実際に販売実習などを行っているが、普通科はしていない。学科ごとにするのは良いが、普通科はできていないというのがどうなのかと思う。

委員

普通科は職業科に比べて地域に関わる時間が少ない。日程に組み込まれていないので、そういう専門的なことなどは関わっていない。

座長

そういう体験は必要なのか？それとも言い方は悪いが、普通科は勉強さえできれば良いという感じなのか？

委員

できれば職業科みたいに、地域に関わることがしたいが、やはり「普通科は勉強」というイメージが強いので、「どうなのかな？」という感じである。

将来のことを見据えると、大人の人や地域の人と関わる機会が増えていくので、学生のうちからそういうことに触れていきたいと思う。

座長

人を育てるには、勿論、学習は大事なことだが、それ以前に人と触れ合うことが大事なのだろうということだと感じた。

委員

キャリア教育を推進するとなると、保育からが始まりだと思うが、保育園と小学校の間の分断、小学校と中学校の分断、中学校と高校の分断というのが、あると聞いている。保育園で折角良いことをやっても、小学校で教わらないとそこで終わってしまう。私立と公立（市立・県立）など、管轄が違うという難しさは勿論あるが、過去にその子たちが何を受けてきたのかという情報交換が、ちゃんとできる体制があると良いと思う。

私も一時期、高校のコーディネーターをしていた中で、高校生たちが「人生は成功しないといけない」と思い込んでいることを非常に感じていた。「良い会社に入る」というところが強い想いとしてあるが、実際に大人を見てみると失敗している人たちがたくさんいる。

「失敗してもいい」という感覚を、子どものうちに持つことができていないことが非常に残念だと感じた。「失敗してもいい」と思うことができる感覚、そういうキャリア教育がされていけば良いと思っている。

委員

例えばテレビ番組で、「しくじり先生」という、要は自分の失敗談を話して反面教師にするというか、人生の体験談を聞くという番組がある。

私は早月中学校出身だが、その当てもCAになった若い女性や色々な海外に行った方の話などを聞く機会があった。私の中ではそれが凄く外の世界のことを知るという意味で鮮明な記憶として残っており、それが自分のキャリアを選ぶきっかけにもなったりしたので、小さい頃のそういう思い出は本当に大事だと思う。

藤野特別アドバイザー

僕はキャリア教育には、自分の仕事と同等の力と情熱をかけている。先程の起業家教育を中高生にしていたり、最近だとインターネット上で商売ができるので、ネット販売をチーム戦でやったりということをしている。これはこの間、経済産業省でも賞をいただいた。早稲田大学や明治大学ではキャリア教育として、様々な分野で活躍している人とディスカッションする授業をしている。成功している人は、その過程の中で挫折の連続であったり、破滅的な失敗などを経験していたりする。「失敗はするもので、失敗を乗り越えていくことが大事である」ということを、子ども時代に見ることが凄く大事だと思う。そういう人は地域の中に絶対居る。滑川であったり、富山県であったり、北陸であったり。探そうと思えば探すことができると思うので、そういう人を呼んで、学生に話をしてもらう機会を設けるのはとても良いことだと思う。

委員

藤野特別アドバイザーへの質問だが、キャリア教育はオンラインでは駄目なのか？

藤野特別アドバイザー

オンラインでも良いと思う。東京で活躍している人を、オンラインで呼ぶということでも全然問題はない。

実際、僕もコロナの感染状況が酷い時は、大学もオンライン授業だったので、オンラインで展開したりしていた。リアルに拘り過ぎることは無いと思う。

勿論、リアルの方がよりベターだと思うが、本物の人は、オンラインであっても十分に伝わるものがあると思う。

座長

生涯学習については次回に回させていただきます。